

令和元年度 教育シンポジウム パネルディスカッション

令和元年12月1日(日)

15時00分～16時15分

鯉城ホール

(司会)

それでは、これよりパネルディスカッションに移りたいと思います。パネリストの皆様は、登壇をお願いいたします。パネリストのみなさまを順にご紹介いたします。

第1部に引き続きまして、千代田区立麴町中学校長、工藤勇一先生です。

続きまして、名古屋市教育委員会の出席者です。教育長の鈴木 誠二 (すずき せいじ) です。

教育委員の 小栗 成男 (おぐり しげお) 委員です。日頃は企業経営者としてご活躍です。またビジネスや人材育成に関する著作があるほか、昨年には声楽家としてニューヨークのカーネギーホールの舞台に立つなど、多方面でご活躍しておられます。

同じく教育委員の船津 静代 (ふなつ しずよ) 委員です。日頃は、名古屋大学のキャリアサポート室の准教授として、学生の相談やキャリア支援にご活躍されておられます。

同じく教育委員の小嶋 雅代 (こじま まさよ) 委員です。日頃は医師として、また健康に関する研究者としてご活躍されるとともに、現役の保護者として子育てにもあたっておられます。

同じく教育委員の鎌田 敏行 (かまだ としゆき) 委員です。日頃は企業経営者としてご活躍でございます。前職である商社マン時代には、グローバルなビジネス社会でご活躍されるとともに、現在は企業経営者として大胆な企業改革に取り組まれておられます。

続きまして、名古屋市立矢田小学校長 松山 清美 (まつやま きよみ) です。矢田小学校は、名古屋市教育委員会が今年度から取り組んでいる、画一的な一斉授業からの転換を進める授業改善のモデル校であります。以上のみなさまに意見交換していただきます。

また、コーディネーターとして、名古屋市立大学副学長の伊藤 恭彦 (いとう やすひこ) 教授をお願いいたします。伊藤先生には、本市の総合計画や教育振興基本計画の策定における有識者をお務めいただくとともに、名古屋市立大学におけるスクールカウンセラーの養成などにご尽力いただいております。

本日のパネリスト、コーディネーターの皆様の略歴に関しましては、配布資料をご用意してありますので、ご参考にしていただければと存じます。それでは、これより司会を伊藤先生にお願いしたいと思っておりますので、先生よろしく申し上げます。

(伊藤恭彦名古屋市長)

はい、それでは皆さんよろしく申し上げます。限られた30分程度という時間でございますので、要領よく進めていきたいと思っております。先ほどの工藤先生のご講演を受けて、非常に熱量のあるお話でございましたので、それを冷ますことなく、上手に伝えていきたいと思っておりますけれど、話は二つの柱です。名古屋市で今後学校を変えていくうえで、これからの時代に生きる子どもたちに必要な力って何だろう、これが一つです。それからもう一つは、この力を養ううえで、これからの時代に必要な学びを支える教育環境って一体何だろうかということ、考えていきたいという風に思っております。

まず、最初に、これからの時代の子どものに必要な力について、船津委員、鎌田委員、松山校長からコメントをいただく形でスタートしたいと考えております。それでは、船津先生お願いいたします。

(船津静代教育委員)

それではよろしく申し上げます。先ほどの工藤先生のお話、大変感動したというか、熱量がおありになっていて、伊藤先生のおっしゃる通り、冷まさないようにしたいと思います。個人的にはじめにお聞きしたいことを話しまして、最後に工藤先生からメッセージをいただきたいと思っております。

私は、講演会に行ったりすると、いいお話を聞くと、やってみたいと思うのです。自分の中の隠れていたものとか、今までちょっとあきらめていたものなどが、細胞として動き始めます。明日も学校が始まるという現場のなかで、今日たくさんの先生方にお越しいただいています。その熱量を冷まさずに、明日から、少しでも、ソフトランディングができるような、そこに向かっていく繋ぎになるメッセージを、ぜひ工藤先生から頂けたらと思います。

現場から声を上げていくことが大事だというお話もあつたんですけど、一人一人が明日からのネクストアクションが大事だと思っております。何から始めるといいかなというところ、少しメッセージをいただくとありがたいです。

私は、大学で学生の就職相談をさせていただいているのですが、学生の5人に2人は就職相談を活用しています。そうすると、そんなにも相談が多いんですねと言われるのですが、今の学生さんを見ていると、小・中・高校にスクールカウンセラーさんがいらっしやったりだとか、先生がカウンセリングマインドを学ばれているので、上手に相談に来られるんですね。自分の解決したいことを、信用できる大人に話ができるということは、私達は「相談できる力」、相談力だと思っておりますが、それが身につけている学生が増えてきている。よく世の中では大学生は子供化してるんじゃないかと言われますが、人を頼って相談できるっていうのはとても大事な力だと思います。

そういった点で、名古屋市では、先ほども説明があつた通り、教育委員会で「ナゴヤ子ども応援委員会」を平成26年に設置して、スクールカウンセラーとか、多様な方々が、学

校に入って、子どもたちを中心に、子どもたちのために動いています。先ほど、16,000人の相談が1年間であったんだという話がありましたが、それは一昨年の件数で、昨年ですと26,000人です。約10,000増えているということ、それは問題が複雑化しているということもありますが、相談する大人を子どもが信頼できる、大人への垣根が低くなってきていて相談できる体制になってきているのではないかと私は感じています。

一方で、子ども青少年局が子どもライフサポートモデル事業というものを始め、矢田小学校でモデル事業も始まりました。これが、名古屋市内全体で始まるというなど思っているのです。先日、見学に参りまして、名古屋の面白い場所をPRしようという授業だったのですが、そこに私たちが見学に行っても、子どもたちは誰も気にしないんですね、大人がそこに入ってきていても、それほど集中している。多くの大人の方、専門家も含めて、教育の場面に大人がいてくれることに子どもが慣れている。

そこで面白かったのが、校長の松山先生に、突然子どもが「先生、お願いがある」「校長先生、自分たちのやっていることを放送で流してほしい」と言い始めたりですとか、その場で、コーディネーターに来ている外部の先生に「このことについて、担当の人に聞いてみたい、電話してほしいんだ」と言ってみたり、子どもが声を大きくして行って、それを大人が引き受けるといった場面がありました。画一的な授業では見られない、子どもって、場を与えて、自分たちで責任を持ってやらせると、大人が考えもしないような動きをすることが本当に新鮮で、こういう授業が増えていくといいなと。そんなこと言われると先生たちが大変じゃないかって思われるかもしれませんが、多くの教育者と一緒にやっていくことが、見てる大人も刺激になっていいんじゃないかなと思いました。

先ほどの、身につけるべき力と、それをどう支援するかということですが、大学生を見ている、子どもを見ている、頑張れば頑張るほどつらくなる時とか、困ったら困った時とか、先ほど工藤先生のお話にもありましたが、自分がどういう状態か分かるということが大事だと思います。そういうことに気づいた子ほど相談に来れる。相談に来たところで大人と信頼が持てる。工藤先生の学校でも1年生は大人との信頼のないところで、2年生のプログラムのところで大人をすごく信頼するようになっている、というところがすごく印象的でした。どこに行っても、大人が、子どもたちに対して、「話しても大丈夫だよ」という状態にある。私達大人自身が自律することも大事だと思います。カウンセラーである自分としては、どんな力をつけさせるかということも大事ですけど、それをつけようと本人が思う途中を支える、お互いに支えあう。子どもと向かい合って、子どもの成長を見られるって、大人にとっても本当に魅力的なことです。将来のある子どもたち、未来のある子どもたちを応援することを、自律・責任をもって大人が取り組むことで、自分たちにとっても、子どもにとってもいい結果になると信じています。そこで、はじめのお願いの通り、工藤先生にはこの思いでいる私たちに、明日からするといよいよ、というヒントとかメッセージをいただけたら、ということで締めさせていただきます。

(伊藤副学長)

はい、ありがとうございます。工藤先生、たくさん注文が出そうなので、あとからまとめてお話ししたいと思っています。それでは続きまして、鎌田委員お願いします。

(鎌田敏行教育委員)

私は、大学時代、休学いたしましてドイツとイスラエルに3年行っておりました。その経験から商社に勤務いたしまして、アメリカ、イスラエルで合計10年ほど駐在し仕事をしておりました。

イスラエルというのは非常に変わった国でございまして、そこにはユダヤ人とアラブ人がいるわけですが、そこで一人総合商社として、パレスチナ・イスラエルの両方の担当をするという仕事をしておりました。イスラエルという国は世界130国から人が集まっておりまして、多様性という点では、世界でも突出した形ではないかと思っております。国を作ったのはヨーロッパから来た白人系の人たちなんですけれども、インドから来た人たち、エチオピアから来た人たちもみんな同じ国民として生活をしています。

色々な国に行きましたけれども、昨年とうとう100カ国目になりまして、本当に世界は広いなあということを感じております。世界には一日が午前0時ではなくて、夕方から始まる国ですとか、あるいは文字を右から左に書く国もあります。あるいは、私がドイツに行った時には、アイセックという組織で行ったのですが、そのアイセックのメンバーと将来の就職先の話をしているときに、「私は国連に行くんだ」と言っている人がいて、世の中にはそんな世界があるかと、腰を抜かささんばかりに驚いた経験もあります。やはり多様性といいますか、文化といいますか、価値観、これがいかに違うかということ強く感じた次第であります。そういったことも含めてお話をさせていただきたいと思っております。

今日、工藤先生のお話を伺ってですね、実に素晴らしい。もちろん、テレビやご著書からもいろいろと学びがあるわけですが、やはり、目的と手段です。

私も、毎年会社の中でスローガンというものをしています。そこでは、「極める」「自ら率先して実行する」、こういうスローガンを挙げたこともありますし、あるいは「原点回帰と創意工夫」を挙げたこともあります。まさに、それを実践しておられるわけで、また同時に、私は会社で、グループ会社のトップの者に、盛和塾に行くように言ってまいりました。盛和塾といいますのは、京セラの創業者であります稲盛和夫さんが作られた塾でありまして、1万人を超える塾生がいます。世界にもどんどん広がっています。その塾が、今月をもって終了することになりました。そこで、またいろいろと大きな学びがあったのですが、稲盛さんがおっしゃるには、世の中には3種類の人がいる、それは不燃性であり、可燃性であり、自燃性である、と。自燃性は自ら考えて行動することができる人。これは素晴らしい。一方、不燃性という人は、営利企業には入ってきた段階ではないはずなんです、評価が低いとか、仲たがいするとかで、どんどん不燃性になっていってしまう。こういったようなことがあります。

公立学校の場合は、小学校であれ中学校であれ、すべての子どもたちを受け入れるのですから、中には不燃性の方もいらっしゃるのではないかと思います。でもそういう子どもたちが、麴町中学校でどんどん変わっていく、これは大変に素晴らしいことです。卓越した経営者だなあと、改めて深く感じた次第であります。できれば、麴町中学校の卒業生に、将来、わが社に来ていただきたいと強く思ったところです。

それではここで、お時間をお借りしまして、名古屋市で取り組んでいることについて少しご紹介させていただきます。

2008年をピークに日本の人口は減ってきております。長期の自然減になることは、

日本の歴史が始まって初めてのことでありまして、社会全体で大きな地殻変動が起きることとなります。そこにAIの急速な進化が加わり、予測困難な時代を迎えることになりました。

着実にグローバル化が進む社会の中では特に、多様な価値観を認め、ともに学びあうということが不可欠でないかと感じます。名古屋市では、世界とつながり、多様な人々と協働・協調でき、未来を担うグローバルな視野と心豊かな人材の育成を目的としまして、今年度より市立高校生の海外派遣を大幅に拡充しました。合計100人を海外に派遣しております。また、英語コミュニケーション能力の向上のみならず、英語を使ったディスカッション、海外提携校とのオンライン交流などを通して、子どもたちがグローバル社会を体感し、自らの意見を伝え、協働性、課題解決能力を身に着けられるよう、この7月にグローバルエデュケーションセンターを開設しております。

来年度から、小学校での外国語教育が必須化されます。名古屋市在住の留学生や海外連携校とのコミュニケーションを通じまして、異なる意見があることを受け入れ、多様な価値観を尊重しながら、他者と協働できるような、なごやっ子の育成に取り組んでいるところであります。

社会の中で、個々の意見が違うことは当然であり、まして、本音ではみんなが同じことを思うはずがありません。心の中では違うけれども、あえて反対することではないかなどいうことは学校でも、社会でもよくあると思います。しかし、みんな違って当然なのですから、それを建設的に表現して、お互いの考えを認め合って学びあえる、そういう経験を積み重ねて今後の人生に活かしてほしい、今こんな風に考えているところでございます。

(伊藤副学長)

はい、ありがとうございました。それでは続きまして、松山先生。スライド使いますので、パネラーの皆さんは、見やすいところに移ってご覧ください。

(松山清美矢田小学校長)

工藤先生のお話を伺った感想から述べさせていただきます。

まず、非常にビジョンが明確だと思いました。自律を目指し、その手段と目的を取り違えることなく、大胆に具体化を実現されている点にとっても魅力を感じました。

私が勤める矢田小学校では、9月から新たな取り組みを始めたところです。学校が目指す目的は、やはり、未来に生きる子どもたちにとって必要な力をつけることです。

それをどのように考えているかということですが、こちらをご覧ください。(スライドを投影) これまでの社会においては、指示されたことが的確にできればよしとされてきました。しかし今の子どもたちが大人になる10年後、20年後には、AIがさらに発達し、社会が大きく変わります。そうすると、求められる力も変わります。自ら考えて工夫する、創造する、こういう力が、より重要になってきます。これは工藤先生がおっしゃる、自律につながるものではないかと考えています。

現在名古屋市では、主体的・対話的で深い学びを実現した教員向けのリーフレット「なかまなビジョン」を手掛かりに、各校が授業改善に取り組んでいます。これは「なかま」

と「まなび」をビジョンのある授業を通して深めていく、そういったための視点が書かれたものです。中味は詳しくお話する時間はありませんが、検索していただくと、市のホームページでご覧いただけます。

これに加えて、本校で、9月から始まったのが、「画一的な一斉授業からの転換を進める授業改善」です。モデル実践校として、(スライドを指しながら)ここにありますような取り組みをサポートするスタッフが配置されました。本校ではわくわくサポーターと呼んでいます。それからタブレットパソコンが160台配備されました。

まず子どもたちに、どのように話をしたかですが、このようなイメージキャラクターを作りました。目指す学習を「わくわく学習」と名付け、このキャラクターを「わくわっくん」と名付けました。この右手のゴールの旗は、「わくわくする問いを、自分で見つけて、自分の力でやり遂げる」ことを示します。つまり、「知りたい! やってみたい!」というようなゴールをつかむことを意味します。左手のタブレットパソコンは、「自分の考えや自分のペースでわくわくして行う」ことを示します。つまり「自分で決める学習」、ということです。本校では主に、総合的な学習の時間と、教科学習では算数を中心に取り組んでいます。

では、9月からの3ヶ月の様子を写真で紹介したいと思います。

まず、総合的な学習の時間では、テーマを決めるところにウエイトを置いて行っています。子どもたちが本当に調べたいと思うようなテーマを思いつくように、ウェビングといった手法で、興味・関心を掘り起こします。その後、計画を立てて調べていく際には、先ほど船津委員がご紹介くださったように、それぞれ子どもたちが自分たちで選んだ方法で調べています。タブレットで調べる子、図書資料で調べる子、電話をかける子、また、インタビューをする子、実験や観察をする子、様々です。

また教科学習では、タブレットパソコンを活用して、学習を進めています。自分の考えを画面に書き、一人一人がそれを送ると、お互いの考えをタブレットで見ることができます。そうしますと、「あなたはなぜこう考えたの?」、といったことを、互いに教え合う場面が出できます。全員の考えを一度に見ることができますので、「あの子の考えを聞いてみよう」と分からない時は席を立って、その子のところに行ったりします。このようなことをしながら、自分の考えを深めるという学習をしています。

また、タブレットパソコンに入っているドリル学習では、個々の回答に応じて適した問題が一人一人に提示されます。そういった点で学びが個別化され、個に応じた学習ができます。

また、体育の授業では、このように互いの動きを動画に取り、それを見合うことで、改善点を見つけ、よりよい動きにつなげていく、そういった活動もしております。

さて、本校は、先ほどの紹介にありましたライフキャリアの視点でもモデル校になっております。子どもライフサポートモデル事業として、キャリアナビゲーターというキャリアコンサルタントの資格を持った人が常駐しています。本校ではそのキャリアナビゲーターが常駐する専用のルームを作り、部屋の看板のデザインを募集して作成しました。

その部屋でどんなことをしているかを紹介します。給食の時間に各クラスの小グループが順番に給食をもってきて、キャリアナビゲーターと給食を食べながら、面談をしています。「今、夢中になっていることは何?」とか「将来何になりたいの?」といったことを、

リラックスした雰囲気でお話します。

また学級への出前授業では、手作りのキャリ芝居を使ったり、高学年はワークシートを使ったりして、出前授業をしています。また、学校行事との関連を図って、多様な職種の専門家を招いての「ミラとびランド」というイベントを行いました。20種類の職業の方を講師に招き、それぞれの仕事について説明を聞いたり、体験したりするブースを、それぞれの職業の方に作っていただきました。こちらの写真はパティシエの方です。ピアノ調律師や、自動車整備士や、鳴海絞の職人さんや、薬剤師さんなど、それぞれの方が、仕事で使っている物を持ってきてくださったり、仕事に関わる実物を持ってきてくださったりしました。このような場合は、いろいろな仕事に対する夢や希望を膨らませるよい機会となりました。

以上のような取り組みを通して、本校では、未来への夢を抱き、主体的に学びに向かう力を育てたいと考えています。以上です。

(伊藤副学長)

どうもありがとうございます。それではここで、工藤先生に少しコメントをいただく予定だったのですが、先に教育委員からのコメントをいただきまして、工藤先生に総括いただくという形にしたいと思います。では小栗委員、心の準備はできていますか。

(小栗成男教育委員)

まずもって、工藤先生ありがとうございます。私、経営者として、今日心に響いたことがいくつかありまして、工藤先生が教育者であっても、よく「経営」という言葉が使われていらっしゃったので、教育も経営という視点で、ワン トゥ ワン ということが大事だな、ということをおぼせてもらったことと、それから「自律」という言葉をよくお使いになっていらっしゃった。時間の関係で質問に移らせていただきますが、いろいろと先生の本も読ませていただいて、今後の学校、教師である先生方が、どのように教育していけばいいのか、ご質問させていただきたいと思います。

昨今、学校の先生って人気がなくなって、本市も応募が少しずつ減っていたりとか、もしくは、言葉が悪いですがブラックと言われていたりする。先生の本の「非常識な教え」の中に、コーピングという言葉が使われていたりする。コーピングを行ったという方はご存知という前提でお話しさせていただきますが、先生の中でも積極的なコーピングとか、消極的なコーピングとかある。それを生徒の中で見るときに、工藤先生はそれぞれ見極めが大事だとおっしゃいました。ただ、本市もけっこうたくさんの生徒数が在籍しているだとか、先生もたくさんいる。そのマクロで見たときに、麴町中学校という一つの学校と対比したマクロで本市を見たときには、どのように学校の先生が接したりだとか、教育委員会がその先生たちに、どのようなアドバイスをしていければ、もっともっと先生を希望する人が増えたりだとか、学校と生徒の関係が良くなったりだとか、言うなら学校同士の仲が良くなったりだとかするのか教えていただけるとありがたいと思います。

(伊藤副学長)

はい、ありがとうございます。それではご質問には後ほどおこたえいただくとして、次

に鈴木教育長にお話をお願いします。

(鈴木誠二教育長)

教育長の鈴木です。工藤先生には、熱のこもったご講演をいただき、ありがとうございます。ありがとうございました。

講演をお聞きする中で、まず思いますことは、熱のこもった講演をお聞きすることによって、本で読ませていただいた行間を埋めるような、そんな気がいたします。もう一つは、その一つ一つのことは、麴町中学校というのが特別な学校ではないということ。そして、先生が取り組まれてきたことの一つ一つは、スーパーマンでなくてはできないことではないな、そういう風を感じました、原点回帰という言葉が委員の中から出ましたけど、思い出したのは、この夏に山口県の萩に行ってみて、松下村塾跡を見てきたのですけれども、そこには吉田松陰という先生が、塾生一人ひとりの能力を見つけて、それを伸ばすということに長けた先生であったこと、それから松下村塾というところは、授業は毎日いろいろな科目があるのですが、吉田松陰は自分の好きなものだけ、学びたいときだけ来ればいいよとしていたんだそうです。江戸時代の寺子屋というのは、ひょっとしたらそんな風に運営されていたんじゃないかな、というように思います。

そういう意味で言うと、麴町中学校の工藤先生の取り組みというのは、一番大事なこと、一番大事な目的さえ見失うことがなければ、教育、人を育てるという原点に戻る、そんなお話であったのかなと聞かせていただきました。

名古屋市教育委員会として、これからの取り組みに活かしていきたいと思っておりますけれど、それをいくつかの柱でお話しさせていただきたいと思っております。

まず一つは、人を育てるということについてですが、松山校長が今、モデル校として矢田小学校で取り組んでいる、個別最適化された学びを実現するための授業改善、これについても、矢田小学校だけが特別な学校でモデル校として進んでいくのではなくて、たくさんの学校で、さまざまな授業改善が進んでいくようにということを期待しています。そのための取り組みとして、今年は8名の実践者であるとか、28名の研究者の方を教員の中から選抜をして、国内外の先進事例を見てもらいました。見てきたことを、早速自分の授業に活かしていただいている先生もおられ、そうした取り組みを続けることで、新しい取り組みをしようという教員がいっぱい育っていくことを期待しているところです。

もう一つ、全教員の中から希望する方に来ていただいて、学習会というものもやっています。そこでも新たな学びであるとか、教育についてグループディスカッションを通じて先生たちがお互いに切磋琢磨して学んでいることをしています。この取り組みも来年度以降も続けていきたいと思っております。

子どもを育てるために、それを育てる教員が育たなくてはいけないと思っています。工藤先生もおっしゃっていたように、かつて日本の教員というのは社会の最先端を走っていた。そんなお話がありました。名古屋の教員、これも工藤先生に言っていただきました、「名古屋はトッランナーだ」という風にお褒めの言葉もいただきました。その言葉が続くような、人を育てる。学校も教員も、それに関わっていただく地域の方々も一緒にトッランナーであり続けるような取り組みを続けていきたいと考えております。

それから、教育環境という中で、タブレットが数学・算数の学習にとっても有効だとい

うことを教えていただきました。実は国も、先週の報道の中で、タブレットを子どもたち一人一人に、小中学生全員に持たせるのだという方針を発表いたしました。名古屋市は、国の発表の前に、こういったことをどうやって実現していくかということ相談を始めておりましたが、この国の動きに遅れることなく、もっと言うと、国のお金を積極的に活用して、そういった環境を一日でも早く整えたいと思っています。

それから、学校の環境ということで、私が日ごろからこだわっているのは、名古屋の学校の校舎はどれも古いです。40年、50年、あるいは60年は経った校舎ですけれども、名古屋市はこれを大事に80年は使っていこうという方針を立てまして、その維持管理に努めております。ただその中で、子どもたちの生活の中に大切なトイレが、いわゆる昔ながらの和式というものが多くて、このことだけは、できるだけ早期に、今よりは快適なものに変えたいと思っています。

最初の市長のあいさつの中で、一円も削らないというお話もありましたので、その言葉を信じて予算をいただきながら、学校をよくしていきたいと思っています。私からは以上です。

(伊藤副学長)

はい、ありがとうございます。それでは小嶋委員にお話をお願いします。

(小嶋雅代教育委員)

時間も無くなってきたところですが、私は保護者代表として教育委員を務めさせています。とても不安に思っていることは、やはりこの不確定な変革期に子どもを社会に送り出すということです。その中で、自律、尊重、創造というこの理念が、大変重要であるという工藤先生のお話には、大変共鳴、共感いたしました。ただ、実際にこれを実現するのは、とても難しいことであって、それにはきっと多くの大人の目が必要であると思います。

工藤先生がおっしゃるように、手をかければかけるほど生徒は自律できなくなる。ここが難しい。手をかけるのではなく、見守り、支援が必要な時には支援できる体制を作ることが大事だと考えます。麴町中学校では、300人の大人が出入りしているというお話でした。名古屋市でも現在、「子どもの未来応援プロジェクト in School」として、保護者の方、地域の方、さまざまな専門の知識を持った方々が、教職員1万人とともに、5,000人という計画で教育に携わっていただくという計画が進行中です。まだ始まったばかりですが、私としては、個人的になかなか素晴らしい企画だ、名古屋頑張ろうって思っています。ですが、麴町中学校では1校で300人が関わっていらっしゃるんですね。ということは、市長、全然名古屋足りていませんね。まだまだ、頑張らなくてはけません。

私、本業では、わが国の健康寿命をどう延伸していくかという研究を行っています。介護予防・認知症予防には、個人がいかに関わり、地域の方々からの信頼感を養えるかということがとても効果があると国際的にエビデンスが確立しています。これから人口が減少していく日本の社会で、工藤先生がおっしゃる持続可能な、サステナブルな社会を作るうえで、学校というのはとっても大きな力を持ったところであるという風に思っています。学校を核にして、子どもをみんなで育てていくという視点はとても大切

なのではないかという風に、先生のお話を伺いまして、改めて感じました。以上です。

(伊藤副学長)

はい、ありがとうございます。それでは、工藤先生から、今の委員の質問も含めまして本来ですとここから5時間くらいお話しいただきたいのですが、5分くらいでいただけないでしょうか。お願いします。

(工藤勇一先生)

はい、限られた時間で皆さんのご質問にお答えできるかわかりませんがよろしくお願ひします。

はじめに、どんなことを名古屋でやったらいいのか、という質問がありましたが、麴町中にもよく聞かれるのは、改革は何から始めたんですか、という質問です。

僕が6年前に麴町中学校に来たときは、ほぼ全員が文句ばかりを言っている組織だった。教員も、生徒も保護者も、みんなそれぞれが勝手なことを言っていた。もちろん同じベクトルは向いていません。ですから、この行事をやりたいという教員がいれば、この行事をつぶしたいという教員がいた。保護者も、もっと自由にしてほしいという人がいれば、もっと宿題だしてくれという保護者もいる。そういうところから始めました。服装一つとっても、もっと徹底的に厳しくやってくれっていう人もいれば、緩くしてという人もいる。

そのベクトルを合わせていくっていうのはすごく大変なんです。でも大変だということをもみんなが理解するところから始めなくてはいけないので、まずは、全員が課題を挙げることから始めました。本を読んでくれた人はわかると思いますが、僕は、まずは全員に「みんなで課題を挙げていこう」といったんですね。1年目の夏休みには、全教員集めて「文句を書け」と。「文句でいい」と。そうしたら、全部で50くらい上がってきたんですね。僕はその間に、保護者とか生徒とかからずっとヒアリングをしていたので、自分の気が付いたことを含めて既に150くらいの課題を持っていました。これを加えて、全部をエクセルに落としました。集まった約200の課題を夏休みの間に、全教員に提示しました。

そして、これを常にいろいろな場面で公開にしていくようにしたんです。PTAの役員会でもオープンにしました。もちろん、学校に課題として挙げられている正反対の課題も含めてみんなでオープンにしていった。

その中には、すぐにできるところがあるんですね、合意できる部分があるんです。これまでは合意できる部分を見逃してしまっていた組織だったんですね。とにかく合意できる部分から、みんなで対話をして、アイデアを出して、課題解決をしていくと。

はじめの1年間で課題に挙げたのは実に340項目になったんです。その年度内に改善できたのは170です。半分改善しました。当然ですが、確実に、教員も、保護者も、生徒も変わりました。問題解決に自分たちが入っているということです。

やりやすいところの一つとしては、労働環境を改善するところから始めました。例えば、「勤務時間外に会議をやめよう」とかですね。じゃあどうするかというと、職員会議のやり方を変えましょう。具体的にはそもそも会議に必要なない議題をなくしましょうと。それで、職員会議で誰かひとりでも寝てしまうようなことがあったら、その議題は価値がな

いから、次回からそういう議題を挙げることはやめましょう、ということにしたんです。

そんなことから、どんどんはじめていったのですが、約3年くらいはこの手法をとっていました。今はその手法をとっていません。そのレベルは脱したからです。超えたからです。今は、全体で課題を挙げて一覧にするのではなく、基本的には組織ごとに解決している。組織ごとに、課題改善策を提案し、基本的にはすぐにGOサインです。ほとんど校長がNOということはありません。なぜかという、さっきも言いましたけど、職員全体で、上位目標を合意しているからです。

麴町中で最も変えることができた共通の意識を一つだけ言いますね、多分、名古屋市さんも今後、絶対変わらないといけないことです。

ここに、2人の子どもがいます。一人は成績はいいけど自分で考えて行動できない子です。もう一人は、自分で考えて、何をするか計画できるけれど今のところ成績のよくない子です。あなたは、どちらの子を育てたいですか。麴町中では、当然、自分で考える子を育てますが、あなたはどうか、って言います。私たちは、これをあらゆる場面で伝えていきます。入学前の説明会、入学式でも話します。さっきの、手をかけて…というのは、入学式のスライドです。入学式の日、保護者が見るスライドです。あらゆる場面で、教員も、いろんな人たちが同じ言葉を語るようになります。

そうすると、上位に据えるべきものが、だんだん一致するんですよ。一致してくると、対話ができるようになります。一致するまでの対話をするかしらないかです。この作業って、最初、大変なんですけれど、みんな逃れるんですよ。みんな逃れて、何がやりたいかっていうと、トップに自分の代弁をさせたいんです。校長に対して「私の意見を言って」。別の人は、全く逆の話を校長に対して別の意見を言う。「私の代わりに言って」と。これを望んでいる社会です。

多分、ここにいる会場の方も、ああ自分のことだなと思うと思いますが、大人もみんなそうなんですよね。これを変えていく作業をしなくてははいけない。我々が育てたい子ども像っていうのは、実は我々が変わらなくてははいけない姿なんです。だから、我々がその対話ができないと、子どもがそのように育てられないんですよ。

さっきの教育委員会の施策を見たら、やっぱり知・徳・体でしたよね。いいこといっぱい書いてありますよね、いいこといっぱい書いてありますけど、優先すべきことが分からなくなるから、ちょっとでもずれると、礼儀正しい子どもになってないから、もっと礼儀の練習しましょうよ、みたいなことが学校で行われる。麴町中にいらしていただいたら分かるのですが、麴町中の生徒はだらしないですよ。一般の学校に比べれば本当に規律なんかないし、1年生の姿を見たら、でたらめみたいな姿ですよ。でも、それが3年生になるときちんとなり、自分の考えを述べられるようになる。それは最優先にすることを合意しているからです。

それで、3年生になると勝手に勉強する子どもになっていくので、保護者の方も、OKってなります。うち学力調査の結果なんか全くオープンにしないんです。それは学年によって違うからです。すごくいい学年もあればそうでないのがありますが、そんなのオープンにしてしまうと、そこが軸になるじゃないですか。大事じゃないから見せない。見せませんって合意しています。そういうことを、みんな合意して一つ一つやっていると、成果が上がらないんですよ。

教員の人気が上がらないのは、当然ですよ。やらされることばかりが多くて、自分たちが当事者になれないからです。さっきの子どもの姿と同じです。自分たちが世の中を変えられますか、変えられませんっていう子どもが育っていますよね。あれって教員の声ですよ。つまり教員が自分たちで変えられないって思っているからです。

変えられるんですよ。僕は、どこからも指導を受けなかったし、国も敵じゃなかったし、教育委員会も東京都も敵ではありませんでしたし、辞めさせようという人たちは誰もいませんでした。それは、そういう順番でやってきたからです。敵ができるような方法でやってこなかったんです。例えば、あいさつ運動、あいさつ運動の問題点っていうのは、確かに不登校の子が来たら、登校渋っている子は困るじゃないですか。教員の立場から言ったら、勤務時間前に出勤しなくてはいけないといった働き方改革の問題もあります。でも、働き方改革で問題になっていますからあいさつ運動をやめます、っていったら敵ができますよね。あいさつ運動をやめるとき、僕は働き方改革のことなど一切言っていない。それって関係ないからですよ。最優先にしなければならないのは、子どものためですよ。働き方改革で問題になっているからでしょ、って言われたら違いますって言います。

つまり、そういうことが大事なんです。どうでもいいことにこだわってそこで戦ってしまうと、上位目標を見失って、小さいところで戦うことに慣れてしまう。そうすると、物事が進まないんです。だから、名古屋市さんがやってほしいのは、やっぱり小さいところからでいいので、みんな遠慮しないで、本当にみんな違ってみんないい、と思うのだったら、みんな違っていいですよ、と言いながら自分と違う人を「間違っている」ということをやめましょう、そういう言い方をやめましょうと。お互いに対話をして、そうすると上位目標って何ですか、とヨーロッパの人たちのようなことができるわけですよ。

千年も二千年も長い間、ずっと命を奪い合って戦争をしてきました。ドイツのナチスがあんな風にやっても、それでも恨み辛みがあっても、それでも第二次世界大戦の時点での科学技術の進歩に、みんなが恐れおののいたんですよ。もう二度と、これ以上科学技術が進んで戦争を起したら、人類は一瞬で終わってしまうかもしれない。とすれば、戦争になる原因をみんなで取り下げませんか、と国の大統領クラスや、首相クラスが本気で言うわけです。それに対して国民の50%以上が賛成する。資源をみんなで分かち合しましょう、関税をなくしましょう、みんなで通貨を一緒にしてみんなで暮らすようにしましょう、文化とか価値観、宗教の違う人間と一緒に生活できるようにしましょう、難民も受け入れるようにしましょう、そのことが戦争になる原因になるものだからです。そのことを本気で対話したから、それを優先にしてみんなで握手できるのです。

そのプロセスを、子どものうちからさせる教育をしなければなりません。だから子どもに当事者になるような教育をしなければならなくて、スウェーデンなんかは、来年度予算で何を買いますかということ小学生から聞きます。小学生からみんなで対話をして決定していくのです。

うちの学校もだんだん進歩しました。実は最近、子どもたちが生徒会の委員会活動をなくしたんですよ。言い方が極端でしたね、形はあるのですが、体育委員会とか給食委員会とか保健委員会とかいうのがありますよね。あれのクラス男子1名、女子1名というのをやめたんです。全部ボランティアに変えてしまったんです。これは生徒総会を通して決めました。なぜかという、最上位目的は、例えば給食の最上位目標は、早く準備ができ

て、みんながゆっくり食べられて、早く片付けが終わって、昼休みゆっくり遊べる、これが最上位。とすれば、俺1年間ボランティアしてもいいです、という子どもがいたんです。そういうことをやって実験をした学年があります。2週間やってみたい、すべてのクラスから6人以上出ればこれはやれますよ、って言ってみんなで話し合っただら、6人出なかったクラスが1クラスだけあって、3人しか出なかった。そうしたら他のクラスが、俺のところは9人出たから、3人貸すよと言ってやったんです。2週間ずっとボランティアで、ボランティアをしても何の損もありません、だからみんな協力してください、という組織を作ったんですね。この延長線上に、今、委員会をボランティア制度にしたんですよ。

そうしたら今、人数がクラス代表男女各1名よりも、もっと多く集まったりする。自分たちで話しあって、どうやったら学校を改善できるか考え始めました。つまり組織もはじめからあるのではなくて、自分たちの生活を自分たちで作るのです。そうすると教員は何をしなければいけないかっていうと、指導者ではなくて、放任でもありません。うちの教員は全く放任ではありません、いつもそばにいて相談に乗れます。子どもたちがこんなアイデアを出してきた、やってみるか。やってみたらどんな課題があるかを想定させて実際にやってみる。やってみながら、子どもたちが自分たちの生活を改善していく。

朝会のやり方も変えようって今言っています。朝会って、全校生徒がみんな集合して、はい並んでください、起立、気を付け、前ならえ、着席、全部命令形じゃないですか。なんかこれ教員がやっている命令だけれども、これ君たちの世界だから、全校集会って何のためにあるの、君らが考えればいいと言い始めました。

で、本丸は、やっぱり授業です。うちの学校は、教科以外のカリキュラムは全部取り替えましたし、特別活動は、今みたいに自治に変えています。どんどん子どもたちに任せて自治をさせていく学校に6年間で変えていきました。でも本丸の授業が自律と尊重を奪い取っている。相変わらず一斉授業だから。数学と英語ぐらいですかね、アクティブなのは。あとの授業はほとんど自律・尊重を奪い取っています。

つまり、我々がやらなければいけないのは教員が当事者になる、保護者が当事者になる、生徒が当事者になる、そのために何をしますか、というところです。対話をしたとき、我々は最初慣れていないので、小さいところにこだわります。ブラック校則が話題になると、ブラック校則だけにこだわります。でもそんなところで、こだわるところで話をするのではなくて、みんながOKなところから話を始める。そうすればヨーロッパの人たちみたいに、恨み辛みがあっても最上位は平和だよ、そのために手を握ろうね、ということができて、そのために手段を選べる。その習慣というかプロセスを我々日本人全員が体験できるような学校教育に変えていくのが、多分今後日本がやらなくてはならないことだと、僕は思っています。以上です。

(伊藤副学長)

先生本当にありがとうございました。

本来であれば皆さんからのご意見をいただきましたのですが、時間もございますので、本日のパネルディスカッションはこれで終了したいと思います。では司会の方にお戻しします。

(司会)

伊藤先生、パネリストの皆様、ありがとうございました。ご来場の皆様、壇上の方々に大きな拍手をお願いします。

(終了)